慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	パネルディスカッション
Sub Title	
Author	佐々木, 力(Sasaki, Chikara) 寺﨑, 昌男(Terasaki, Masao) 宮島, 喬(Miyajima, Takash) 杉浦, 章介(Sugiura, Noriyuki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2003
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.特別号『将来編』 (2003.) ,p.21- 33
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	創設50周年記念特別紀要 第1部
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069957X-000S2003-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

パネルディスカッション

パネリスト（五十音順）

佐々木　　力　氏（東京大学）

寺　崎　昌　男　氏（桜美林大学）

宮　島　　喬　氏（立教大学）

司　会

杉　浦　章　介　君（社会学研究科委員）

司会（杉浦）　これより第２部のパネルディスカッションに入りたいと思います。第１部においてご報告いただいた３人の先生方のお話しを踏まえて，ここでは先生方の間での討論やご来場のフロアの皆様からのご発言を取り入れて，今日のシンポジウムのテーマであります「21 世紀の大学院」につきましてさらに考えて行きたいと思います。

３人の先生方から提起されたさまざまな問題について，それぞれに議論すべき点が多くあるものと思うのですが，ここで司会の方から議論のために幾つかの論点の糸口を提供させて頂きたいと思います。先ほど，寺崎先生の方から，大学における教育と大学院における教育をそれぞれどのように定義してゆくのかという問題について，棲み分け，腑分け，そして確認ということがございました。そこでは，教養ある専門人の育成というのが大学院の教育であるのに対して，専門性への志向をもった教養人の育成が学部の教育であるということでありました。大変分かりやすく明晰な定義であると思いますが，この両者の間の関係には，連続性と非連続性があるのではなかろうか，そして両者は区別されるだけでなく，どのように接合されるのであろうかということを考えさせられました。なぜそのようなことを言うかといえば，学問のもっている体系性ということを考えるからです。社会科学の分野において最も典型的な例としては，法律学を学ぶ場合ではないかと思います。いきなり専門化した特殊な分野の法律を勉強するわけにはいきませんから，より基礎的なものから積み上げるようにして順番にやってゆくことが必要になります。経済学の場合においても，より基礎的な理論を修得した上で，より専門化した分野の学習を行ってゆく方が効率も良いだけでなく，効果も大きいものと思われます。このような意味での体系性ということがあります。それから，これとは別に，社会学をはじめとする社会科学の分野の多くでは，歴史性とか歴史的文脈というものから全く自由に，ある著作ならある著作，ある言説ならある言説だけを取り上げてみてもあまり意味がないということも少なくありません。そういう意味で，学問のもっている体系性や文脈性を，どのような形で学部における専門的な志向をもった教養教育のなかで実現していったらよいのかということを考えさせられます。一方で，教養教育といった場合，非常に間口が広いだけではなく，出入りも自由なものを想像しますが，こうした教養教育のもっている非常に融通のきくフレキシブルな特性も，一度，言語であれ芸術であれ，あるいは環境といった分野であれ，それぞれ少しでも突っ込んで内容を深めようとすればどうしても体系性や文脈性にぶつかってしまうのではないかと思います。専門化へ向かわなければ底の浅いものに終ってしまうということです。この辺りについてどのように考えていったらよいのか，寺崎先生，いかがでしょうか。

寺崎　ありがとうございました。いい論点を出していただいて感謝いたします。

それに答える前に，先に，奥井復太郎先生の大学論のことに触れましたが，私が述べたのだけではちょっと不適当で，少し資料を持ってきておりますので，簡単に補わせていただきたいと思います。

奥井先生によりますと，「新制大学発足当初の根本的な誤解というのは，四年制の学部がカレッジであるということを認識しなかったという点にある」というのがご主張です。「カレッジというのは本来，アメリカの大学におけるアーツ・アンド・サイエンスのカレッジのように，プロフェッショナル・スクールや大学院と連携した大学の構成体の一つにすぎないものだ。そのことがわからなかった」。ということは，先程の文脈で言うと，戦後の大学では学部本体論というのは成り立たないはずだったんだ，というのが奥井先生の持論だと思うのです。結局，「教養教育，専門職業教育，それから，研究者の育成

と研究作業という3つの機能を一挙に果たすのがファカルティとデパートメントの融合体である学部だと我々は考えている。しかしこれらを離して考えなくてはいけない。その上において有機的に大学院とつながる」。こういうご議論です。

私は，初めて1960年代の末に読んだのですが，まだピンと意義がわかりませんでした。しかし今になって思うと，非常に身近な問題だということが分かります。

杉浦先生のお話しになったことを別の言葉で言いますと，アンダーグラデュエイト段階の専門ディシプリンというものと大学院でのいわゆる専門的な本当のディシプリンとの連続をどうやって保証するか，さらに学士段階が教養教育，何でもござれのリベラルスタディズとなったときに，基礎はバラバラのものになる。それが大学院に入ったときに，実は結晶しない，基盤を与えない。こういうご心配のことだと思うのです。これは専門によって違うかもしれません。

私のやっている教育学というのは，やっている人たちが自分で雑学だと言っているぐらいのことで，初めからあまりディシプリンがないんですね。だから広いほうがいいというふうに思うんです。ポイントはただ一つ，人間というものをわかっているかどうかということ。素朴に言うとそういうものなので，ディシプリンという厳しい考え方を私どもはあまりしない傾向がございます。

ただ，にも関わらず，専門ディシプリンと，リベラルスタディズとの関係をどう付けるかというのは，非常に大きい問題だと思うのですが，2つの点を考えておく必要があると思っています。

一つは，マイケル・ギボンズなどが言っているような知のモード論というのがあります。ああいう問題を考える必要がある。つまり，専門ディシプリンの中だけで知の創造的再生産ができるか，できないのではないか。知の再生産を可能にするもう一つの道というのが第2モードといわれる。問題そのものはディシプリンの外側に生まれる。すなわち問題があればその次にそれに対応する知の体系というものが探究される。この第2のモードというのがなければ，現代における知の生産はできないのではないかと。主にイギリスの学者たちの議論ではですが，私はあれには非常に関心を持つんです。

我々はその点では，第2モードのところで頑張っていくということをすべきである，というふうに思います。

第2番目は，一体我々は専門的な学識というものを，ただそれが専門的な順次性があるとかカテゴリーを絶対覚えなきゃいけないという気持ちだけで覚えられるかということです。そうではないんじゃないか。その前提に，「これが問題だ」という判断がないと，本当はディシプリンの学習も進まないのではないかと思っております。そういう意味からも，私はおっしゃるほどの危機は感じない。ただ，だからといってディシプリンの部分を免責するという理由にはならない。従って，実はディシプリンの基礎をつくっていくための方法論は何かということは考え続けていかなければいけない。しかし，それは従来と同じ状況の下で考えていくべきことではない。こういうことでございます。

宮島　実は，私も国立大学で学びましたが，独立研究科の大学院で勉強した。今では不思議はないのですが，東京大学が社会学研究科を立ち上げまして，社会学，文化人類学，国際関係論という3つの専攻からなり，空間的に言いますと，駒場と本郷と両方にまたがる。関わる学部も2つです。そういう所で勉強しておりましたので，学部が本体であって，その上に大学院がなければ……という連続性ということをあまり感じないでまいりました。したがいまして，大学院の時代に，国際関係の人，文化人類学の人とゼミに一緒にいたために，ずいぶん教えられたこともありました。大変いい勉強の機会になったと思います。

ただ，社会学帝国主義があったように思います。それは当時の研究科戦略の中で，社会学が中心でなければいけないという考え方があって，名称も「社会学研究科」だった。国際関係論や文化人類学の人たちから見るとずいぶんやりにくかっただろうと思います。

社会学は，領域科学ではなくてアプローチ科学だと考えておりますので，必要な知識を詰め込んで覚えなければ専門家になれないというのではなくて，一つのポイント・オブ・ビューといいますか，見方を身に付けることが重要と思います。したがって柔軟に専門性は考えられる。逆に，他分野の方も進出しやすいという面があるかもしれません。独立研究科の中で割にやっていきやすいディッシプリンではないでしょうか。

佐々木　寺崎先生と宮島先生のお話を聞いて，事前に調整したわけではないのですけども，かなり共感できるところが多くて，先輩のお二人とこの席を共にさせていただいて大変よかったと思っております。とくに，寺崎先生の，戦後の大学改革というのが決して外からの押しつけではなく，敗戦を経験した日本人による内発的な努力によるというご指摘には賛同できます。戦前から戦後への時代が変わるとともに，高等教育研究体制は，ドイツ大学専一型からアメリカ的なリベラルアーツ・カ

レッジ型を包含した形態に脱皮した。私も関係している東大教養学部は新制大学に特異なリベラルアーツ・カレッジの成功例ではないか，と私は考えております。自然科学とか数学の分野での日本人の欧米の学問へのキャッチアップは確かに早ったように思える。例えば，数学ですと，ペリーが来日したのが1853年ですけど，それから半世紀後には世界で一流の業績が高木貞治のよって産出されるというように，他の東アジア諸国では考えられないほどの大きな努力が日本人数学者によってなされた。

ところが，1930年代に国家主義的な学問の弾圧が本格化するや，ドイツの知識人もそうでしたけど，ほとんど抵抗できる知識人がほとんどいなかったという事実に対する謙虚な反省をして，自然科学のあり方は，単なる専門的業績を産み出すだけではなく，もっと総合的な学問の，人間にとっての意味を問い直すために，私たちの科学史・科学哲学の研究室もできたのでした。そのような新制大学の新鮮な志を継承することを忘れてはならない，と私は思います。そのような戦後の大学改革について省みますと，寺崎先生のお話からは大変有益な示唆を得たと思います。

もう一つ，寺崎先生のお話の中で，大学院の教育が充実しているのはアメリカなんだというご指摘もその通りだと思います。これも手前味噌に近いことになりますが，私自身実際そういう経験をしております。大学院の博士論文を指導し得る専門人が日本の教育者としているかどうかに関しては，私は少なからず疑問に思います。とりわけ，文科系でこのことは言えます。私はアメリカ型の大学院教育を自分のところでやろうと思って，この20年以上努力してきたわけで，その課題を何とか日本の中で実現していくことが重要ではないかと考えています。

世界の教育先進国についてよく言われることらしいのですが，後期中等教育で優れているのがフランスのリセらしい。一流の若手知識人・学者，例えば，サルトルとかメルロ=ポンティなどが中・高校生を相手に教育指導することがどんなに素晴らしいか，想像ができます。それから，学部（アンダーグラデュエイト）教育では英国が特筆される。個別指導のテューター・システムがその良質の教育を支えている。アメリカはグラデュエイト・スクールというドイツ型専門教育システムを19世紀後半から採用しまして，20世紀に成功を収めることになる。最初にそのような教育システムが作られたつくられたのがジョンズ・ホプキンズ大学で，その後ハーヴァードとかプリンストンなんかが見習ったわけです。このアメリカ的プロフェッショナリズムは，やはり世界で一流ではないでしょうか。

日本の教育で何がいいかというと，予備校の教育らしい。もちろん，半ば冗談ですが，必ずしも嘘ではない。ところが，今，少子化で，予備校は恐らく遠からず消えていく運命にあるのではないかと危惧されておりますので，日本で優れたところが何もなくなってしまうのではないか。私も，寺崎先生が話されたことを肝に銘じて学部教育・大学院教育の調和的発展に志したい。学部的教養のバックグラウンドがないと専門教育は成り立ちません。その下の初等・中等教育のことも見逃し得ません。日本は，明治以降の近代のみならず江戸時代から，初等教育では極めて優れた点があったと思います。

これは私の日本史の先生のマリウス・ジャンセン先生と英国近世史のローレンス・ストーン先生が共同研究で指摘されたことですが，江戸時代の日本の子どもは識字率・算数能力は世界一だったはずです。ジャンセン先生は，2000年12月10日に亡くなり，ストーン先生はその前年夏に亡くなられました。ジャンセン先生とは個人的に大変親しくさせていただきました。19世紀の英国と日本のリテラシーの比較によれば，近代英国のあのような優れた教育システムにかかわらず，19世紀の幕末明治維新期では日本人のリテラシーが世界一だったらしい。これはフェアな判定だと思います。19世紀英国の場合には厳格な階級社会であったので，労働者階級の教育の質は端的に低かった。それで，ともかくそういった優れた日本のリテラシーが実現されていたことにはそれほど不思議ではない。その基礎学力に危険信号が点り始めたのが，最近叫ばれている「学力危機」だと私は理解しております。戦後真摯に定着を図ったリベラルアーツ・エデュケーションの上に優れた専門人を育成し，国際的に高い識見を発信できる人を教育する心構えが重要ではないかと私は信じます。

それから宮島先生のご発言に移りますが，先生のブルデュー批判には，賛同しかねます。私はフランスの，とくに左派知識人と親しいものですから，敢えてコメントしますが，ブルデューらがEUに反対するのは別にインターナショナリゼーションに反対するのではなしに，具体的にアムステルダム条約とかマーストリヒト条約だとか，労働側に厳しい，EUのあり方に批判的なだけだと考えます。EUは，アメリカと日本の経済的なセクターと競争するためにリージョナルな経済を破壊する方策も盛り込んだ，それに反対しているのであって，私は，彼

らを国家主義――「エタティスム」が原語でしょうか――と非難するのは適当ではない，と思います。

このレッテルは19世紀においてはルイ・ナポレオンだとか，ビスマルクに対して使われたレッテルなわけですね。それから，極めて不幸なことに20世紀の社会主義の実験はほとんど例外なく「国家社会主義型」でしかなかった。私はスターリン主義支配体制のことを言っているのですが。マルクス，エンゲルス，それからマックス・ウェーバーも「国家社会主義」（シュタッーツスゾツィアリスムス）という言葉を使っていますけど，肯定的な意味においてではありません。これを古典的なマルクス主義と同一視するということが最近の日本の思想界でごく一般的に行なわれていることですが，それは明確におかしい。

しかし，「国家主義」の克服は，重要な社会学の課題になると思います。というのは，例えば，東大法学部のオフィシャルなジャーナルは『国家学雑誌』と呼ばれます。社会科学というより，「国家学」だ。「シュタッツスレーレ」が原語でしょうか。まさしくドイツの後進国家のあり方を日本も継承し，「国家主義」国家に近代日本はなり，それを克服しきれていない。それを現代日本は未だに引き継いでいる。そういう抑圧的なイメージの「国家主義」を，個人の自立概念を重要視した共生のための社会化によって克服することこそが枢要な社会学の大きな課題だと，私は考えておりますので，新自由主義に抗して，パブリックセクターを守ろうとしているブルデューを「国家主義」と一緒に括るのはどうでしょうか。2000年のメーデーを期して彼はヨーロッパ規模でのインターナショナル建設の提言を出しましたが，それはまさしくEUに対抗する別のインターナショナルである。要するに，彼は，社会民主主義者が主張しているそういったEUの統合に対抗し，リージョナルな経済だとか，個人の自主性を生かし，さらに移民労働者をも擁護する形での別のインターナショナリズムを提言している。そのような思想の持ち主に「国家主義」のレッテルを貼るのはいかがなものでしょうか。私が理解している限りでの彼らの言説を「国家主義」というのははっきり誤りであるというように私自身は考えております。

簡単なコメントとして，お二方の一般的に大変啓発的な，私の拙い話とかなり調和するさまざまなことを大変学ばせていただいたということの前提の上に，お話し申し上げた次第です。

司会（杉浦） 宮島先生何か。

宮島 ナショナリスムという言葉ですが，国家主義ではなく，国民主義とか訳してもいいんですが，とりあえず「国家主義」と訳しました。エタティスムではなくて，ブルデュー，トッド，シュベヌマンの立場は，ナショナリズムというべきでしょうか。

ご指摘の点はそのとおりだと思います。ただ，私自身EUの研究をしている観点からすると，フランスのブルデューや，トッドがEUの仕組を知らなさすぎるというか，関心がないというか。

例えば，EUの中で富の再配分を行うどういうシステムがあるのか，それが15年間の間にどれだけ北と南のヨーロッパの間の経済格差を縮めたのか，フランスの知識人はあまりよく知りません。それは彼らの知的な関心の焦点がそこにないということがあると思います。ヨーロッパの中で，フランスの知識人が自分たちのイデオロギー，あるいはある観念に固執する結果，客観的に起こっていることを十分把握していないという批判も可能だと思います。

私は基本的には，ブルデューたちの視点は何が大事な価値なのかを言っていて，彼らの社会学者としての一貫性を評価したい，という立場です。ただ，フランス国家だというふうに言う前に，もっと多様な選択を今の彼らも考えてほしい。どうも選択の緊張がないのではないかというのが感想です。

司会（杉浦） 今，ヨーロッパにおける知的状況についてのお話がありましたが，これからの大学院における教育や研究を考えて行く上で日本以外の諸外国の状況は極めて重要な要因となってゆくと考えられます。先ほど佐々木先生の方からも，アジアの諸国における，知的創造も含むような活力とポテンシャルの高さについてお話しがありましたが，アメリカの大学院においてもあるいはヨーロッパの大学院においても，こうしたアジアをはじめとする非欧米的な知的なインプットが大きな活力の源となっているように思われます。例えば，アメリカの一流と呼ばれる大学院のコンピュータ・サイエンスの研究科に行ってみると，中国や東南アジア，インドなどからの留学生や教員の多いことに驚かされます。そしてこの分野で優秀なデパートメントになればなるほどこうした傾向が強いという印象をもちます。また優秀な人材になればなるほど，直接，活躍のできるアメリカやヨーロッパの大学院を目指していて，日本の大学院は地理的文化的に近いにもかかわらず，遠い存在となっているようです。日本の大学院の国際的競争力という点を考えると，この「日本を素通りする優秀な人材」ということは今後極めて重要な問題となるのではないかと思います。

国内だけを見ているような大学院改革やプログラムでは，日本の大学院は最も重要なリソースを自ら失っていくように思えてなりません。佐々木先生は中国からの留学生を多数指導されていると伺っておりますが，この点いかがでしょうか。

佐々木　そのことについては，私はここ十何年くらい実体験させていただきましたので，それをもとに話させていただきます。大学院の制度化で，アメリカ以上進んでいる国はないと私は考えます。日本はとても，まともに例えば隣国の中国人留学生を受け入れる体制ができているなどとは誇れない。

アメリカでは，例えば，私自身もそういった一員だったわけですけど，「外国人留学生」という考え方はない，と言っても過言ではないと思います。普通のアメリカ人自身が移民で，既に17世紀，18世紀，19世紀，ずっとそういった歴史をもってきたものですから，「外国人」と安易な区別立てはしない。ただアメリカの国籍を持っている人と比べて区別するために，私たちは「インターナショナル・ステューデント」と呼ばれておりました。日本だけではなく，インドや中国の相当優秀な学生がアメリカを目指すのには明らかな根拠がある。私は今は大学院総合文化研究科に帰属しておりますけれども，7，8年前の大学院重点化までは理学系研究科に属しておりまして，そこで専攻主任をしておりましたので，さまざまな会議に出ていたわけですが，その中でいろいろな統計を見せていただきました。たとえば，アメリカの大学院のランクだとか，中国人留学生は日米の大学院のレヴェルをどのように評価しているかとかの統計です。サイエンティストとして中国から留学する場合，アメリカ，日本の大学院でどこを目指すかという統計もございました。それによりますと，とびっきり優秀な学生は，やはりアメリカのトップの，いわゆるアイビーリーグを中心とするグラデュエイト・スクールに行きます。東大に来る学生はレヴェルの点でどの程度の学生が来るかというと，アメリカの中水準のステート・ユニヴァーシティと大体同じぐらいのようです。実際に，彼らのアメリカの大学院に入るために受けた試験だとか，それからGREといいましたか，そのような大学院に入るための試験で比べると，大体そういった人たちが東大に来るらしい。

ただし，確かにそのとおりなのですけども，あらゆる点でアメリカの大学院が優れていると考えることはできないと思います。私のところに留学して来る学生が，どうして日本の大学院を選んだのかにこのことは関係してきます。コンピューター・サイエンス，数学，エンジニアリングなどの文化帰属性が希薄な学問分野で，アメリカに行けば，確かにスタンドプレーをやれる個人としては世界一流の知識人なり，科学者，技術者として活躍するようになるのでしょうが，中国社会全体，あるいはアジアの社会全体をこの方向に導くという方針は出せないと思います。要するに，そのような学問分野では，個人プレーが可能ですので，優れた世界のリーダーになれる人は中から出る。

例えば，数学の分野ですと，中国人でハオ・ワン（王浩）というゲーデルとも親しかったロジシャンはそういう人です。それから，ゲージ理論という理論物理学者の楊（ヤン）さんという人もそうです。そういう人は中国人からも出るが，しかし，彼らの研究エートスはほとんどまったく欧米的です。中国文化を捨てることによって一流の学者になると言っても過言ではないと思います。

留学生は将来どのような方向に自分は進むべきかということを，広範囲に熱心に考えます。私はプリンストン大学大学院に入学したてに，ギリスピー先生という大学院主任に，「君はアメリカで就職するつもりか」，と質問されました。私は，17世紀のヨーロッパ史の専門家で，数学史だとか，科学史でアメリカの教壇に立つことも面白いとは思いましたけれども，何か親しい人々の顔が浮かんできたりして，やっぱりあの人たちと切れてしまうのかという郷愁に似た気分を持たされたことも事実でした。ともかく中国人だとか，アジアからの留学生に限って言えば，そういった個人プレーとして優れた知的な分野で活躍するよりも，彼らは，たとえば中国社会に帰ったりすると，日本と同じ文字を使うとか，類似の文化的背景を持つだとかで，日本で学んだこと考えたことを身に着けて，優れた専門人としてだけではなしに，総体として中国社会をどうするのかまでも考え続けるであろう。あるいは，台湾だとか，韓国の留学生も私の所に来ていますけれども，何かしら自分なり周辺の，生まれ育った文化や社会そのものを考えていくときに，日本の代表的知識人である福澤諭吉を研究したり，中国の知識人の歴史を研究したりする意義がでてくるだろう。

私自身はほとんどメンタリティからしてヨーロッパ人と同等なのですけれども，そういう東アジア出身である学者であることにこだわりたい。ラテン語も読み，ギリシア語も読め，西欧近世数学史についての博士論文を書けるが，日本人としての文化的背景にも，同時にこだわり続けたい。私は別にナショナリストではないのですが，ともかく，西欧帝国主義に抑圧されたアジア人という出自は忘れないようにしたい。同様に，全体として中

国社会を考えていく姿勢を日本に来て，そこで学ぶ中国人留学生にも持ち続けて欲しい。アメリカに行くよりは，そっちのほうを選択して欲しい。

それから，アメリカの大学院で，たとえば中国史研究に志す場合，その人はリージョナル・スタディの所属になります。そのリージョナル・スタディは，実は戦争中，スパイ教育として制度化された憾みなしとしない。前述のジャンセン先生も含めて，アメリカの日本史研究者は日本語に大変堪能で，日本人よりも，ある意味で丁寧な日本語を話すような人もおりますけれども，彼らがどうしてそんなに優れた日本語を話すようになったかというと，戦争中のスパイ教育として日本語を教育されたからなのです。彼らは，アメリカに対する知的な協力というのを前提とした上での研究を，中国だとか，日本からの留学生に要請します。もちろん，それほど直接的にではありませんが，最低間接的にはそういうことがいえるだろう。私自身，アメリカの大学院でヨーロッパ史の研究者として研究しておりましたが，外国語の試験の一環として，日本語の試験を受けることもできた。私はヨーロッパの研究者なのでフランス語，ドイツ語は，当然，英語で受けました。日本語の試験は一切受けようとしなかった。また，日本のことを報告して点数を稼ぐこともできたと思うのですけど，私はそれを拒否しようとしました。それでギリスピー先生という，先程言及した先生に，日本での近代西欧科学受容についての報告を要請された際に，「私はヨーロッパ研究者なので，日本については報告したくない」と言って一度は拒絶しましたら，えらく怒られました。「君はそれでも日本人だろう」というようなことで，再度要請されました。「それだったらあなた方に利用されない限りで」という理由で引き受けるはめになりました。もちろん，そういう理由は口に出しては言いませんでしたが。私の反応を「過剰反応」と考える方が大部分でしょうし，私はそれを正しい指摘だとは思いますが，私が渡米したのが1970年代後半のヴェトナム戦争直後であったことを思い起こしてください。そういう反発心を持ちながらも，先生の言い分に素直に従いまして，日本での西欧科学技術の制度化についてリポートして，それでそれなりに高い奨学金ももらったりするはめになってしまいました。

ともかくアジアからの留学生に関しては，いい意味で私たちが，対話的に（恩着せがましくなく），文化的な恩恵を与えられる側面は必ずあると思います。とくにここ慶應義塾だとか東大は，上から教えるというよりも，共に考えるという意味で，アジアからの留学生と近過去の歴史や文化や社会の問題を研究できる利点は否定しようがない。

最近の歴史教科書の見直しで問題になったことですが，たとえば，「南京の虐殺」は果たしてどうだったかという問題はどう取り組まれるべきか。

私の研究室への留学生はこう言います。「それについては共同の研究がなされていないから常に誤解が残り続ける。中国人が，何十万殺されたという場合，死傷者を言うことがある。すなわち，傷害を負った人まで含めている。要するに，単なる傷を負った人まで含めて多少大げさに言ってしまうことがある」。ところが，犠牲者がそんなに多かったはずはないを，虐殺行為それ自体がまったくなかった，というように応答するから，混乱が増大してしまう。そういった問題に誠実に対応する信頼できる知識人，われわれと一緒にものを考えられる国際的な常識を持った人を日本で教育することによって，以上の問題はごく自然に解決できるような知的な共同の場が開かれてきます。少なくとも，私はそのような希望を持っています。

私たちは，そのように，アジア出身の一流の知識人を，ナショナリズム感情とは無縁に大学専門教育を介して創ることができると思います。同時に，われわれのマイナスの側面をも彼らを通じて学べるだろう。それから，私たちは最近の経済政策の失敗で自信喪失ぎみですけれども，しかし，そのことはアジア総体として見れば，そんなに自信喪失するほどのこともなくて，しっかりと反省した上でのことですが，意外と私たちを高く評価してくれる人々がいることに自信を回復できもする。私自身，実際，アジアからの留学生と対話しながら学ぶことによって，研究の方向もがかなり変わってきたことを告白いたします。すごい知的な活力にもなっているというのを自分でもはっきりと感得することができますし，そういうことから，アメリカにひけを取らない専門教育を確立しようという意欲も沸いてくる。われわれがこれまで歩んできた歴史をそれなりに糧にできる学徒もいるということをプラスの価値として胸に宿しながら，共同の生き生きした学問の場を創造したいと考えているところです。

司会（杉浦） 先ほど寺崎先生の方から，今後，大学院生の数は約25万人ほどになることが予想され，この数は，一昔前の日本の大学における学部学生数と大学院生数を合わせた高等教育全体の学生数の半数に匹敵するものとなる，というお話がございました。この点，今の佐々木先生のお話しにも関係するのですが，これほどに

増加すると見込まれる大学院生に対して，「知的な場」という制度としてどのように整備していったらよいのかという問題があります。これまでにも『留学生10万人計画』というものがありましたが，この計画には学部学生の数も含まれているにもかかわらず，現在，この目標と実態とは大きく乖離しているというのが事実です。そこで寺崎先生にお伺いしたいのですが，先生のおっしゃる通り，2007年から2010年にかけて大学院生の数が大幅に増大するとしても，その中に占める外国からの留学生についてはどのような姿になるものとお考えでしょうか。

寺崎　わかりません。その問題について私はまだ，今，端でいろいろ見ている段階です。今教えております，桜美林大学は，もともと中国，北京にできた崇貞学園というのがその発祥なんです。ですから，非常に中国との関係が深くて，今，3分の1が中国からの留学生です。その方たちの勉強の様子を見ておりますと，いろいろな見方が周りにあります。

例えば，大学院で留学生をマスターで3分の1以上迎えたところで，その大学院の全体の水準は下がってしまうという説がある，という説をなす先生もいるんです。これは受け入れれば受け入れるほど大学全体は下がる。こういう話です。

他方で，では留学生の側から見るとどうかというと，日本語はできるはずだということで，一応日本語の試験はもちろんやって，面接もやって入れる。日本語の能力自体が特に落ちるというわけではない。会話が下手な子，不自由であるように見える子も，文章を書かせたらとてもいいという学生も確かにいるわけです。

ところが，その次から出てくるのは教育システムの違いです。日本語をしっかり4年間勉強して，そしてそういう語学の試験に通ってきているわけですが，やってきた事柄というのは，大体，日本文学とか日本語です。その人々を，国際学研究科の中の環太平洋地域研究科というのと国際学研究科と両方専攻があるんですがそこへ入れておいて，きちっとした修士論文を国際学研究で書けと言うと，大変な無理が起きるわけです。つまり内容的な知識です。これと言語的な能力との間の落差は大きい。しかしいったんそれを克服して，ドクターのところまで行くと，いい論文を書くんです。最初はきつい。さて修士論文のところで国際化がどんどん進んでいったときに，このような事態に日本の大学は耐え得るか。最後に問題はこっちに返ってくるような気がするんです。

もう一つはおカネ。カネの問題は非常に深刻で，ほとんどの学生が夜はラーメン屋かコンビニで働いている。アルバイトは常習化いたします。特に修士の2年生ぐらいになったときに，中国人の先生に言わせますと留学生は最初の1年間は非常に新鮮で張り切っている，しかし，日本の暮らし，生活に慣れてきた2年生のところで，ほっておくともう日本の生活の中に入ってしまって生活していく。カネですね。これを手に入れるのに追われてしまうということ。それがドクターへ来てから脱して専門の言葉とそれから内容との両方をつくっていくのは，非常にきついことのようです。ですから，国際化の現状も将来もかなり難しいことだと私は思っています。

司会（杉浦）　ヨーロッパの，特にフランスにおける外国人の受け入れの事情について，宮島先生いかがでしょうか。

宮島　社会科学系，あるいは人文科学系の特殊事情を申しますと，私たちが，例えば，ヨーロッパに留学するときには，ヨーロッパのことを勉強しに行くわけです。文系の方，例えば仏文の人たちはフランス文学の勉強に行く。歴史の方はフランス史の勉強，あるいは，ドイツ史の勉強に行く。ところが，今，フランスに参りますと，アフリカや中東から来る留学生たちは，フランスのことを研究するために来ているわけではないのです。自分の国の高等教育機関では専門的なディシプリンが学べないから，それを学ぶということで。したがって初歩的な学部の授業から入っていくわけです。この対比を日本の場合に適用いたしますと，日本に来るアジアの留学生の中で，日本社会に興味があり，日本文学に興味があり，日本の歴史に興味があり，そういう勉強の仕方を追求している人たちがおります。しかし，多くはそうは言えないのではないか。

そこで，例えば，日本の階層構造をやりたい，日本文学の『源氏物語』をやりたいといってやってくる留学生に対する指導は，これはゼミなどで専門にできるのです。しかし，経済学や社会学を勉強したいといって来る留学生に何を教えられるか。これはとても難しい問題だと，私は思っています。

これから先，日本で留学生を大いに増やしていくというとき，日本のことを勉強したいから来る人たちに対する受け入れと，日本で初めて経済学をやりたいとか，社会学をやりたい，政治学をやりたいといって来る人とでは受け入れの準備が違ってきます。そういう点を大学院教育としては考えていかなければいけないと思うのです。私も大学院教育を担当している者として，それに悩んでおりますが，この点は自然科学とちょっと違う問題

ではないかと思います。

司会（杉浦）　さて，ここでシンポジウムにご参加下さいましたフロアの皆様方からご意見を伺いたいと思います。第1部のご講演や第2部のパネル討議におけるここまでの議論について，あるいは『21世紀の大学院』という本日の基本テーマにつきましてご発言いただきたいと思います。壇上の3人の先生方よりもコメントを頂きたいと思います。どなたかございませんでしょうか。

フロア発言者①（川合隆男教授）　きょうは素晴らしいお話を伺って，非常に啓発されてシンポジウムに参加して本当によかったという感じがしております。

いろんな話が出ました。丸善学派という話も出ましたけれど，もともとは福澤諭吉が丸善を支援して，それがその後の丸善につながっていくわけです。そういう意味では福澤諭吉は「翻訳の知的職人」と自分でも言っていますけど。そういう意味で確かにそういう面があって。

ただ，先程の「サポート」という例もありましたけども，福澤諭吉の『学問のすゝめ』を見ると，「耳で聞くよりも目で見ろ」と。それは，「目で見る」というのは読書も一つですけど，実際にその中で読書というのは人間の知的活動の一つでしかないので，実際にはオブザベーションの観察であるとか，あるいは，談話であるとか，それから，スピーチであるとか，それから著作であるとか，それと並んで読書ということがあるわけです。『学問のすゝめ』は，明治の5年前後，9年ぐらいまでかけて書かれたわけですけども，日本の学校制度，教育制度が定着して，その動きは私なんか素朴に感じることとは，福澤諭吉が言おうとした『学問のすゝめ』が違う方向に歩んでいってしまったのではないか。『学問のすゝめ』の中にも，「学者，学問に入らば，大いに学問すべし。但し，学者，小安に安ずるなかれ」ということを言っています。「大いに学問すべし」と言いながら，実は学問というのにそんなにこだわるなということも言っているわけです。それは人間交際というか，人間の生き方に，学問とか，経済とか，法律がどうつながるかと。

私，きょうの話を伺っていて，近代日本の学校制度，教育制度が歩んだ，その制度化。そういう意味では確かに近代科学の制度化，学問の制度化なんですけど，その制度化のあり方というのが，何かだんだんひとり歩きして学問がますます専門化して細分化して，本来は福澤諭吉が『学問のすゝめ』の中で，学問と人間とをどうつなぐかと。漢学を見て，ただ諳んじるという。人間を忘れて，ただ規範として教える。どうやって人間とつなぐか。そういうところで始まっているわけで，そういう意味ではだんだん近代100年。日本の場合まさにそうですけど，学問が人間と離れてしまう。あるいは学問が個別科学として，先程の自然科学とか，人文科学とか，社会科学。本来それは学問としては同じ土壌で，先程鈴木先生が，土壌をどうつくるかということを，まさに的確におっしゃっていますけど，非常に細分化されて個別化して，その中にいつの間にか社会学も一つの学問と。社会科学の中に個別に，そこに閉じ込もってしまっているというところがあって。そういう意味では，確かに制度化されてリテラシーが上がってきましたけど，結果的に1945年までの歴史を見るとやはり，先程，『国家学雑誌』の話も出ましたけど，国家学化したり，あるいは軍国主義化したり，あるいは教養主義化したり，あるいは学歴主義化したり。本来の人間と学問，どう関わるかと。そういうところが切れてきた。やはり戦後までずっと100年の制度化のあり方というのは，もう一度考え直す時期にきているのかなと思います。

先程，中国の留学生の話も出ていますけど，それぞれの制度的な仕組みが違うので，やはりこの辺で何かもう一ぺん近代学問の制度の歩み方，国々でどう違ってきたか，あるいは，中国の場合の学問の制度化というのは，やはりアジアとして共通につくれる高等教育のあり方というのを何か議論をすべき時期ではないか，また，アメリカの場合でも先程先生方のお話しあったようにいい面がたくさんあるわけで，何かそういうもうちょっと広い意味で，それこそグローバルかもしれませんけれど，同時にグローカリズムというか，グローカルに高等教育制度というのをどう考え直す何かそんなような問題が，きょうの中でかなり大きなテーマかなという印象を受けたんです。

フロア発言者②　お三方の先生方，非常に貴重な話を聞かせていただきまして，非常に勉強になりました。いろいろ触発されたのですけども，今，私どもの大学院を担当しておりまして，その担当している中で，急激に周りが変わってきております。その変わってくる中で，どう考えていいのかよくわからないことが多いんです。その中でお三方の先生に，現在の我々の置かれている状況を，これからのことをご説明していただければと思います。

というのはどういうことかと申しますと，まず大学ということで考えてみて，高等教育，大学，あるいは大学院を含めてですが。帝国大学が発足するのが明治19年で，文科大学制の帝国大学が続くのは大正9年までですか。私立と官立とでちょっとずれているみたいですけ

ど。そこまで大体35年間続いて，それで学部制の帝国大学で，そして戦争，戦後まで大体20年間。新制大学になって大体50年過ぎて，その間に，ここが我々の考えるところのうまく説明つかないところなんです。

今，大学をご定年になっている方というのは，そういう意味では日本の教育制度で初めて，自分が大学で受けてきた教育制度。そこで，そこに教員として定年まで勤めて出ていくという。自分が習った制度と，勤めた制度が同じという意味では初めてだろうと思うんです。それまでは大体，自分が学んだ高等教育制度と，それから，自分が教えて，定年を迎える頃というのは大体変わっていた。それがそうではなくて，全く同じになった方が，今，定年になっている。そこで，今，大学院をどうするかとか，大学をどうするかという発想をしておりますので，どうしても自分の経験からものを語ってしまうんです。だけど，果たしてこの制度をそんなに長く続くんだろうかと。恐らくその制度が変わりかけている姿があちこちに出ております。出ているんですけれども，さて，今の制度ですと，例えば，きょうお話に出ましたロー・スクールだとか，あるいはビジネス・スクール。これもまたあの学部みたいに考えるのではないかという気さえしないでもありません。

そのときに，ちょっと横からものを考えてみますと，そういう意味では日本の大学制度大きく揺れたとき，いつだったかというと，それは恐らく昭和43年頃の大学紛争です。というのは，あの時期の大学紛争というのは，考えようによってはある制度的な寿命，ある種の寿命だったのではないかという気がしないでもありません。あそこでぐっと抑え込まれて，その制度が続いていってしまった。その中で，私，育ちましたので，なかなか制度が新しくなるということの理解がうまくできないんです。

お三人の先生方。外国でのご経験も非常に広いと思いますので，あるいは歴史的ないろいろな制度的な変化というのをご存じだと思いますので，これからどういうふうに。そういう意味では我々が持っている思考のパターン化されたものに慣れてきたばっかりに，及びもつかないことは一体何を落としてきたのかということ。先程の川合先生が学問論のところで展開されたことと併せてお答えいただければと思っております。

寺崎　大学生活の終わりに近いというのは，一番ここでは私だと思うんです。あと2年で70歳の桜美林の定年がまいります。

おっしゃいました中でちょっと正確でないのは，私は中学校までは旧制だったんです。一番最初の原体験みたいなところでは今の学生諸君とは合わないところがあるんです。しかし新制高校は，その第3年目でございましたから，それからあとは彼らと一緒です。にも関わらず，私は時代は変わったと思います。

私は，紛争が，特にシステムの面での変化を生んだかというと，そうではなかったと思います。あれはまさに高度経済成長の真っ只中で起きたものです。私はあれを一種の「親殺し」の運動だったと思うんです。あの当時まで育った学生たちが，自分を育ててくれた親を殺した。親の中で一番若いのが，当時我々ぐらいの歳で，もっと上が，それこそさっきお名前が出た丸山眞男さんたちだと思うんです。そういう方たちが大学を去られるような変化はありました。しかし，システム変化というのは驚くほどなかったんじゃないでしょうか。外国の学者が来て，日本の大学はあれだけステューデント・パワーにやられておいて，よくぞ制度を何も変えないで羨ましいと言ったそうですが，本当に変わらなかったんです。ですから，私は今の急激な変化のほうが恐い。恐いというよりも，どう対応していいかわからない思いにとらわれます。

例えば，最低言えることは，頭の中をうんと軟らかくして，ともかく今までのシステムを根本の所から見直す。外側の試験で合格したものは単位にするとか，最近やりますね。ああいうこともじゃんじゃんやる。ITをどんどん使って，来なくても卒業できるなら，それでも構わない——というぐらいやってしまう。というぐらいに，我々たちは今の制度というのを無理してでも軟らかくするということに力を注がなくてはいけないと思っています。

あとは学生諸君の変化。これは大きいことで，私は今の学生諸君と付き合うのには非常に骨が折れます。きついのは，彼らは「言葉」というものを，私どもの時代ほど信頼していないという印象があるんです。そうではなくて，映像とか，音響とか，つまり別のカルチャー，これについては我々より非常に高い能力，感知力を持っている。そのギャップに私などの世代はもうほとんどついていけません。先生方ぐらいの世代は，まだ何とか追いつけられるのではないかと拝見するのですが。

フロア発言者③（宮家　準名誉教授）　教養部が解体したり，数多くの学校ができ上がったときに，特に私立大学の場合には一種の権威付けのために大学院をつくるということが非常によく行われましたし，そういう形で大学院が非常にたくさんどんどんできたことがありま

す。私は設置審の委員として認可した責任がありますものですから，非常にそれを感じているのですけども。その大学院が現在になってきまして，今，文科省の視察委員をやっているんですけれども，一番大きな問題というのは定員割れでございます。慶應義塾はいいんですけども，新しい私立大学が数多くの大学院をつくりましたけれども，特にドクターコースの場合にはほとんどが定員割れが起こっております。これをどう対処するかということがこれからの問題でございます。

定員割れの原因は2つあります。ひとつには，学生の志向とすれば，レッテル志向と申しますか，ブランド志向と申しますか，国立大学のいいところへパッと行きまして，私立大学には来たくないといいますか。そういう志向があります。二つには国立大学などの教員の側も一定の学生の数を確保したいという志向がありますから，両方が相乗りいたしまして，現在の私立の大学院がこのままでいきますと，つぶれていく可能性が出ております。桜美林はさすがに見事に教職員のための大学院をつくられましたし，非常に斬新なことをおやりになっておりますけども，目先を変えない限りは，今，大学院はじり貧になっていくと思います。

逃げ道は幾つかあると思いますが，一つは，留学生をどんどん入れていくこと。これが一つだと思います。

もう一つは，世代を変えていって，いわゆる定年後の方であるとか，あるいはまた子育てを終わった方々であるとか，そこに標的を合わせなければいけないと，そういう状況にきていると思います。

そういうことを今後どうやっていくべきかということを，きょうはご専門の寺﨑先生もいらっしゃいますから，いかに大学院が生き延びるかということにつきまして，アドバイスをいただければ非常にありがたいと思います。

司会（杉浦） あと1つ，2つ，簡単な質問をお受けしたいと思います。

フロア発言者④ 佐々木先生は，（レジュメ一番下）「東京大学とは異なる独自の大学院の役割を考える」とあります。どういうふうに違うのでしょうか。寺﨑先生，（レジュメ3番のd）「教養ある専門人の育成」。これは大学と大学院と分けて考えるのでしょうか。どちらが教養で，どちらがプロでしょうか。宮島先生，（レジュメ一項目目の一番下）「『均質化』ではなく『分化』」と書いてございますけども，この2つのレベルについてはどういうふうになるのでしょうか。

佐々木 今の質問は，かなり具体的な質問で，確かに時間切れで展開できなかったところもありますので，少し話させていただきます。

日本の近代大学について柳田國男が『青年と学問』（岩波文庫に収録）の中で指摘しているのですが，日本の大学制度は，入籠型というかピュラミッド型というか，同じ価値観でほとんどの大学ができているという。たとえば，東京帝国大学というトップの大学のがあったとすると，他の大学はそれよりも一段小型というか，そういう仕組みでできているというのです。東京芸術大学は，しかし，別の価値観でできている例外的大学ですが，本当に例外的です。

ところがアメリカですと，必ずしもそうではなくて，たとえば，ハーヴァードでアンダーグラデュエイトの数学の教育を受けたら他のところに移るべきだ，という暗黙の価値観になっているから，大学院はプリンストンに行く。こちらのほうですと，いわゆる道場破りができますので，広い世間に出て，そのほうが学者として成長することができます。確かに，考え方が異なり，学風が違う同水準の大学がアメリカには多数併存している。

ところが日本の場合には，東京大学と質的にその小型の大学が大部分という構造になっていはしないでしょうか。先ほど言及した東京芸術大学は価値観がはっきり違った大学です。芸術志向の学生は，東京大学みたいなところよりは，こっちのほうがはるかに上だと思っている。あと，体育大学もそうかもしれません。そういった価値の多元性がもっと認められてよい。私は大学の設立理念はもっと多元主義的であるべきだと思います。優れた多様な価値観を持った大学が，いい意味での競争をすればいいわけで，そういった切磋琢磨によってそれぞれがよくなるというのが理想でしょう。

戦前ですと確かにそのような多元主義的な価値観が大学にはあった。哲学だと，東大ではなしに京大に行って，その優れた先生の下で修行することが一番よい学問的薫陶を受けられるしという価値観がありました。

あるいは，私は東北大学の数学教室出身ですけども，東北大学の数学は戦前ではある意味で東大よりも優れていたんです。というのは，たとえば林鶴一だとか，藤原松三郎のような，むしろ碩学といわれる数学者はそちらにいた。私の直接の先生は，淡中忠郎先生ですが，漱石の『坊っちゃん』の〝山嵐〟のモデルになった人の後任になった数学教師の息子ですけども，彼は，四国からわざわざ東北大学に行ったんです。1908年生まれです。東北大学の学者たちは宣伝が下手ですから，その辺の歴史的事情は一般に知られていませんけども，戦前は「東

北月沈原（ゲッティンゲン）」と言われて，むしろ官僚的な法学部志向なんかの人は東大に行って偉くなればいいんだけれども，学問でははるかに自由に研究でき，例えば女性も入れた帝国大学が東北帝国大学であった。それから「傍系」といって，文科系から理科系に「逸れて」進学する学生や，高校時代にストライキやって追放されたりした人が入れる唯一の帝国大学が東北大学だったのです。そういう特性を身につけた大学がともかく存在したことが重要なのです。東京大学のいう善し悪しは別にして「国家意思」に強く拘束された大学ではなしに，別の価値観をもった大学が存在しても悪くはない。むしろ，奨励されるのではないか。だいぶ前になりますが，天文台は東京大学の附属施設から離れましたけれども，あれは東京大学に留まっていては天文台をハワイに作れなくなるからなのです。これはごく卑近な例ですけれども，そういういろんな拘束から脱することのできる利点を利用しない手はない。

慶應義塾の場合には，法学や経済学や医学関係のプロフェッショナル・スクールとして，あるいは女性にとって特別魅力あるインスティテューションとしての特徴を整備するだとか，東大が持ち得ない価値観を持った魅力ある高等教育研究機関になれる基盤は十分あると思います。80年代の一時期，司法試験で早稲田とかがずっとのしてきた時代に，東大，京大，東北大といった国立大学を優先させた序列はいずれ崩壊するのではないかと思ったことがありました。あっ，これは今の国立大学のやり方だったら，慶應，早稲田あたりはうまく行けばのしていくな，と。ところが後で，慶應や早稲田でも，何か足を引っ張る要因があるようで，たとえば，学生の数がものすごく多いとか，優れた学生が多少いても，やはり東大を全体として追い抜けないような弱点をかかえているらしいことに気づかされた。井筒俊彦先生のような学者が慶應にはいたのに，何か足を引っ張る要因があるらしいと考え直した。

現在の日本の大学制度の閉塞には，受験制度が大きく影響している。東京大学の学生は，偏差値が高いものですから，なにか自分が特別の人間であるかのように勘違いしてしまったいる。他方，東京大学以外の学生は，自分が失敗してしまった人間のように勘違いしてしまっている。このような勘違いは，双方の学生にとって不幸です。

アメリカですと，私は一時期，英語の講習のためにテキサス大学オースティン校にいたことがあるのですが，プリンストンとかハーヴァードのような，東部の，いわゆるエスタブリッシュメントとは異なった，石油による資源力を生かし大学作りをやろうとしていました。大学の指導者たちはステイト・ユニヴァーシティでもこれからのしていくぞといった気概を述べていました。必ずしもそうはなりませんでしたが。躓きの要因がいろいろとあったからなのでしょう。整備の仕方によっては，私は慶應大学が，かなり自由に飛翔できる基盤は持っていると思います。

明治の初期だと，東京大学と福澤がつくった慶應義塾とでは別の価値観に基づいていたがゆえに，特色ある人材を産み出すことができたのではないか，と思う。ところが戦後は相当東大型に近くなってしまったのではないでしょうか。私は，内部の人間ではないからよくは分かりませんけれども，ともかく特性を出した，そういう多元的な価値観に基づく大学の創造は重要な課題だと思う。

それから，その前に話が出たことに一言。私自身は戦後生まれで，いわゆる「1968年世代」の代表的な選手です。私が数学を辞め，数学史に専門を変えた理由は，68年以降のいわゆる寺崎先生なんかにとってはありがたくなかったかもしれない，その時代の影響を受けた論客です。慶應義塾大学の安東伸介教授という有名な英語の先生（現在は名誉教授）が，「君はあの世代が産み出した一番いい論客だね」というふうにお褒めくださいました。日本は最近，ソ連邦の解体とともに，左派知識人の大量転向を経験しました。彼らには彼らなりの変革の理念があったのでしょうが，それに対する自らの幻滅体験が大量転向に繋がったと私は見ています。この理由について考えてみると，日本は左翼の歴史が旧新左翼とも，スターリニズムの巨大な影響のもとに置かれていたという事実に気づかされる。

ヨーロッパの，特定の政党のことをあげつらうのは問題でしょうが，共産党を日本共産党を比較してみてください。その開かれ方は比較にならないです。それから新左翼諸党派にしても，ほとんどが，典型的なスターリニズム組織論を採用しています。たとえば，黒田寛一氏の組織論は，スターリン主義組織論を断固採用しよう，そうでなければ勝てない，ということに尽きます。こんな反民主主義組織論では誰もが見向きしません。それから，別の話になりますが，私は昨年，「日独裁判官物語」という映画を鎌倉で見ました。同じ敗戦国でも，ドイツでは社会民主主義的価値が浸透しているのに対して，日本の裁判官制度は，実に非民主的です。判事も法服を着てふんぞり返っているように，ものすごく権力主義的で

す。ドイツの場合には戦争の反省も責任者がはっきりしていることがあるからだと思いますけれども，明確になされ，裁判官の政党支持も自由だし，同じ市民の立場から裁判に参加するという姿勢が確立しています。

その転機はどうも1968年前後だったらしい。ドイツは民主主義的方向に変わった。もちろん，十分にではありませんでしたが，日本とは対照的でした。日本では，戦争の最高責任者の天皇が責任をとらなかった。1968年以前は自衛隊違憲の訴訟とかが幾つもあったのです。ところが，右翼の介入がものすごく凄まじくなり，地方の自治体の選挙だとかにものすごく露骨な介入をやった。こうして日独で大きな違いが生まれてしまった。そういうことを，映画の解説に立った法曹人が話していました。

重要なのは民主主義的価値を重視することです。その根づき方が，日本でははっきりと不十分だと思います。北欧諸国で環境政策が進んでいるのは，その民主主義的手段がとりあえず定着しているからです。学問のあり方にせよ，戦後的な価値の根づき方全般にせよ，日本ははっきり70年代に入って後退したと思います。私は自分が背負った様々な学問的課題，理系から歴史学に転換する際に背負った問題を，自分の中で誠実に反芻しながら，あまり世間的に妥協することなく，知的に誠実に，なんとか普遍化し，言語化して，あとの世代にも継承できるようなものにしたいと，そのように考えております。それは自分の中に閉じこもるというのとは別だと思います。余計なこともしゃべったかもしれませんけども，今，私が言いたいことはそういうことです。

寺崎　宮家先生がおっしゃったような大学院の生き残り方というのをわかっていたら，今頃，私は学長になっていると思います（笑）。わかりませんね。

ただ言えることは，桜美林の話が出ましたが，少々冒険ですが，とにかくアジアからの留学生を受け入れているわけです。今はマスター，2カ年だけで200人，実員でおりますから大変な数です。それをしないとだめだと。実員は埋まらないということになっております。埋まっているのは幸せだとみんな言っています。

今の大学職員の方相手の専攻はなぜできたかというと，文化政策専攻という中に高等教育の私どもが担当していた科目がありました。それを開いて運営してみたところ，町田の渕野辺の先のあのへんぴな所に土曜日にコマを開くと，現職職員の方たちがたくさん来られるんです。全院生の半分ぐらいが社会人で大学職員と大学に関連した専門団体職員の方たちでした。これは需要があるんだとわかって，新専攻を開いたのです。で，20人定員でやるのに，150人ぐらい問い合わせがありまして，受験者27人です。今，満杯です。この4月から始まりましたが，フウフウ言っております。そういうふうに，どういう新しいニーズが生まれつつあるかということを大学としては鋭敏に受けとめるということしかないのではないかという気がします。

もう一つご質問のありました，「教養ある専門人の育成。」これはどこの仕事かという点ですが私は，大学院だと思っております。学部は，専門性に立つ新しい教養人の育成だ，こういうふうに思っております。新しい教養というのは何かということであります。立教の頃に私は，新しい教養のカタログに入れてもらいたいものが4つあると先生方に申しました。

一つは，環境。一つは，生命。それから，人権。最後は宇宙。この4つの知的領域を新しいリベラルアーツの中に入れるべきだ。

第2番目は，鈴木先生もいらっしゃいますが，外国語の力でございます。これは大事な教養の中身であろうと。保健体育も廃止してはならない。ただし，必修からは外すということでやってまいりました。

佐々木先生のおっしゃったことに元気付けられて言いますと，今，起きている大学改革は戦後最大の改革だと言う人が時々いますけど，とんでもない間違いだと思っております。今，我々が直面している問題は本当は50年前に潜在的に日本の大学に課せられていた問題だと思うんです。それが今，21世紀の初めから半ばに向けて大規模に問われているということにすぎない。そういう位置付けだろうというふうに思っております。

宮島　社会学的認識においては均質化ではなく分化というのはどういうことか。私はグローバリゼーション批判をするときに――批判と言いましても，否定するわけではないですが――いわば価値のレベルで，現に起こっていることに対してどういう態度をとるかという問題と，それから，認識論のレベルで取らなければならない態度はどうなのか。

その認識論の問題として言えば，我々は社会集団というものをよく対象にしますけども，これをホモジニアスなものとして扱ってあまり疑問を持たれない時代がずいぶん長く続きました。今はそういう時代でなくなってきている。そういう意味でのディファレンシェーションか，あるいはスペーシフィケーションを努力してやっていかなければいけない。ジェンダーか，エスニスティ，あるいは障害を持つ人とそうでない人，高齢者とそうで

ない人とか，様々な区別の中で議論していかなければならないことが増えてきている。

独特の「平等」の理念をもっていて，エスニシティやジェンダーによる「区別」の試みにどちらかというと警戒的だったフランスでも，つい数年前から，ついにマイノリティの研究をする人たちが「エスニスティ」のカテゴリーを導入すべきだという議論を始めました。こういう視点をなぜ導入するかというと，それは不利な条件にあるエスニックマイノリティの人たちの地位を改善するために，そういうデータが必要なんだという。この点は重要でしょう。

司会（杉浦） どうもありがとうございました。予定いたしておりました時間も大分過ぎて参りました。本日のテーマは非常に大きな問題と影響をもつテーマであり，限られた時間の中では議論を尽くすことは到底不可能であろうかと思います。これを機に，今後も議論を発展させて行くことこそ大切であり，そのような議論の成果や問題提起を社会学研究科の実践活動の中で発表して参りたいと思います。

本日は，長時間にわたりまして，ご清聴ならびにご参加いただきまして，誠に有難うございました。また，3人に先生方にはお忙しい中，しかも長時間に渡りましてご参加頂き，貴重なご意見を伺うことができました。それでは，本日のシンポジウム第2部のパネル討議をこれにて終了させていただきます。ご協力有難うございました。